

拡大写本の今後をさぐる

第2回勉強会まとめ

「弱視を学ぶ～弱視児童の読書状況について」

慶應義塾大学経済学部教授

中野泰志 先生

まとめ

1. 自己紹介

2. 拡大写本に最初にかかわったのは1988年で、白黒反転が必要だったケース。それ以後いろいろな人とかかわりいろいろなとり組みをし、現在に至っている。

3. 結論から先に述べると

- ・ ボランティアによるプライベートサービスへのニーズが無くならないか？
- － 元々ボランティアは拡大教科書製作の仕事が無くなることを目標に運動してきたはず。
- － 今教科書会社も大変な思いをしながら、より良い標準拡大教科書を作ろうと努力している。
- ・ 私達は、教科書だけを見てはいけない！弱視児童生徒の幸せを絶えず考える必要がある。
- － 弱視の子どもにとって、教科書があるのは当たり前のことであり、それ以外にさまざまな苦勞をしている。
- ・ 当たり前だけれど、教科書が読めるようになって安心してはいけない！
- ・ 補助教材やテスト問題等は対象になっていない！
- ・ 課題図書や教養を広げる児童書等も対象になっていない！
- － 児童書拡大の運動をしているが、本を通して弱視の子どもたちがきちんと理解されてその理解が世の中を動かしていくことを考える必要がある。
- ・ 出版社はプロとして努力をしているが、営利企業でありその努力がいつまで続けられるかわからない！
- ・ 体育、技術・家庭、日常生活動作等の体験が必要な内容には対応できない！
- － 音楽室には教科書を置く台がないから音楽の教科書を持ち込めない。歌詞だけコピーして歌ったり、教師が工夫し自作している場合もある。
- － 裁縫の場合教科書が読めるだけではだめで、実際細くて、布とのコントラストがはっきりしない糸を使って作業できなくては意味がない。専門家の指導が必要。
- ・ 教科書だけでは弱視教育は出来ない！拡大教科書の普及により弱視教育を受けるチャンスが減少しているように思う！
- － 拡大教科書を発注すれば先生はこの子は大丈夫と思うのは間違い。専門家とつながるようになって欲しいし、その子が普通に生活できるような情報を与えることもプライベートサービスの一環。

4. 事前にいただいた要望質問について

- ・ 視覚障害について全般、弱視の見え方、弱視の子ども達の気持ち、また、

訓練によって視力が改善する子はどれぐらいいるか？

- ・ 私たちが弱視について伝え聞く常識？に従って教科書を作っているがそれが本当に見やすい物となっているか確信が持てない。
- ・ 利用者がどんな拡大教科書を望んでいるのか知りたい。例えば教科書に収まらない大きな表、地図、大きな紙に印刷してポケットに入れるなどしているが、そういう作り方は有効か？など。
- ・ 拡大読書器、ルーペなどをどんなとき使い、またそれらがあることによって、どの程度読書状況が改善されるか。盲学校と一般校ではどのように違うか。
- ・ 標準拡大教科書では、本文が指定ポイントで、その他はもっと小さいポイントが使われています。ルビも含めてそのような小さい文字はルーペを頼りに読んでいるのですか？
- ・ 拡大教科書を使う児童のいる学校の現場を知りたい。
- ・ タブレット端末の普及活動が進んでいると聞かすが、どの程度有効か。それが弱視の子どもが勉強できる最善の方法か？
- ・ 外国の拡大教科書事情は？
- ・ 拡大教科書の今後は？

答え

- － 弱視は眼鏡をかけたり、治療を受けた上で見る機能に障害がある状態。訓練で目の使い方を向上させることは出来ても、視力そのものが向上するわけではない。
- － 拡大教科書が利用者にとって見やすいか、どのようなものを望んでいるかは、生徒や先生に直接聞くのが一番。
- － 地図や年表はいろいろな見方があるので、一種類で万能なものは出来ない。
- － iPadは地図のように部分と全体を目的に応じて見るのに適している。また、検索ができるというメリットがある。
- － 必要に応じて拡大読書器を使い、小さい文字はルーペを使うなどしている。
- － 学校の現場とうまく連絡がとれない場合は、中野先生に問い合わせたい。
- － タブレット端末はとても有効だけど、使えない子もいる。拡大率の大きい子は行替えが楽な拡大読書器の方が使いやすい場合がある。
- － アメリカや韓国は元々教科書の種類が少なく、電子化も進んでいるが日本ほど拡大教科書の種類が充実している国はない。またボランティアがこれだけ重要な役割を果たしているのは日本だけである。
- － 拡大教科書の今後は私たちが作っていく。

5. 弱視児童生徒の読書環境の変遷

- － 点字で読む全盲の子の中には一分間600字程度のスピードで読めるケースがある。

- 視覚障害者用の教科書は、1909年に発行された点字教科書が最初。昔は、弱視児も点字を使っていたが、軽度の全盲ではないとのことで、1963年に最初の「拡大教科書」が作成された。1975年頃から手書きのボランティアが登場した。
- 発達障害の子ども達にも使いやすいように、デジタルへ移行しようとしているが、使えない子も必ずいるので、ボランティアの仕事はなくなるらない。
- 高等学校は教科書の電子版が販売開始。
- 弱視生徒のためのデジタル教科書の実証実験も本年度から開始。

6. 改めて弱視児童生徒の困難さを考える！

弱視児童生徒が困難に直面する主な場面

- ・ 「生きる力」を育てる
 - 自分を大切に思うことができる力
自分を知り、他者との違いに気づく力
自分が効果的にできる方法を知り、その方法を好きでいる力
自分の出来ないことを知り、必要な依頼ができる力
自分の果たすべき役割を知り、役割を果たすことで喜びや生き甲斐を感じる力
- ・ 「コミュニケーション」をとる
 - 話しかけられたときやまわりの状況が分からなかったり、表情がわからず、相手の気持ちが読み取れないなどの困難に遭遇している。
- ・ 「日常生活」（移動、運動を含む）を送る
 - 階段や段差でつまずいたり、エスカレータを逆走したり、さまざまな困難を経験している
- ・ 「読み書き」をする

拡大教科書は弱視教育への入口にすぎない。拡大教科書が給与されて安心してしていると不幸になる弱視児童生徒もいるかも？

7. 弱視とはどんな障害？

- ・ 視覚障害の原因は眼球だけでなく、神経や脳の損傷、脳の発達、心因性もある。
- ・ 最初に読み書きの効率ありき！
 - 一文字一文字正確に読める、まとめて速く読める、長時間読書しても疲れないことなどを総合的に判断。小学校1年で100～200、6年で300字ぐらいを目指して欲しい。
 - 読書の速度が遅い場合は点字の方が良い。入試などの速度が重要な時は点字、手紙の確認などゆっくり読んでもよい時は拡大というように選択肢があってもよい。
- ・ 読み書きの効率が低い原因を探る必要あり！ 拡大が必要な場合、どのくら

いの拡大が必要かを探る。数ある拡大方法の中でなぜ、拡大図書が必要なのか！

- ・発達段階、重複障害、疲労等が理由で支援機器の利用が困難なケースで拡大教科書へのニーズが生れた。
- ・どんな拡大教科書が良いかを探る！

標準拡大教科書は出版社が近年、力を入れて作っていて質の向上が見られる。それで満たされる場合そちらを選び30ポイントを超える大きな文字サイズや白黒反転等はボランティアの役割と割り切る必要があるのでは？

日本ほど拡大教科書の充実した国，ボランティアの力のある国はなく，仕事が減ったからやめるではなく子ども達に必要な児童書作製をしたり、出版社への協力もお願いしたい。